

国
(問題)
語

2015年度

〈2015 H27092019〉

注 意 事 項

- 1 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。
- 2 問題は2～9ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
- 3 解答はすべて、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。
- 4 マーク解答用紙記入上の注意
 - (1) 印刷されている受験番号が、自分の受験番号と一致していることを確認したうえで、氏名欄に氏名を記入すること。
 - (2) マーク欄にははっきりとマークすること。また、訂正する場合は、消しゴムで丁寧に、消し残しがないようによく消すこと。

マークする時	● 良い	○ 悪い	○ 悪い
マークを消す時	○ 良い	○ 悪い	○ 悪い

- 5 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
- 6 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにすること。
- 7 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。

(一) 次の文章は社会学の入門書として書かれた本の一節である。これを読んで、あとの問いに答えよ。

現生人類は生物学的に、英知人 (Homo sapiens) と規定されている。文字通りそれは、人間と知性が切っても切れない関係にあることを示している。旧約聖書『創世記』にアダムとイヴの楽園追放の物語がある。『創世記』はこう説く。アダムとイヴは人間の祖先は最初、楽園で何の苦勞もなく暮らしていた。しかし二人は、知恵の木の実を食べることで楽園を追放される。それ以降二人の子孫は、「額に汗して働く」ことを強いられている。キリスト教の文脈ではそれは、きわめてネガティブに解釈されている。すなわちそれは、人間の原罪にあたる、と。しかしそれを、ポジティブに解釈することも可能ではあるまいか。たしかに人間にとって、労働は苦痛のタネかもしれない。しかしまた労働によって、人間が世界を創造してきたことも事実である。その意味ではアダムとイヴの楽園追放の物語は、人間の誕生と人間の動物的存在からの解放の物語でもあったのである。

人間は知性と同時に、多くのものを手に入れることになった。たとえば言語、道具、遊戯……が、それである。その意味では人間は英知人は、言語人 (Homo loquens) 、工作人 (Homo faber) 、遊戯人 (Homo ludens) ……でもある。それらを概念的に整理することは、ひょっとしたら大切な仕事なのかもしれない。しかし遺憾ながら、わたしにはそうは思えない。というのもそれらは、相互に分ち難く結びついているから。たとえば知識社会学と文化社会学は、截然と区別することができるだろうか。一般に知識社会学の開拓者と称されるのは、ドイツの哲学者 M・シェーラーである。シェーラーは社会学を、「文化社会学」と「実在社会学」に大別する。すなわち前者 (宗教社会学、芸術社会学など) は、精神によって駆動され、理想的なものを志向する活動を扱う。それに対して後者 (政治社会学、経済社会学など) は、欲動によって駆動され、現実的なものを志向する活動を扱う、と。

その上でシェーラーは、「知識社会学」を「文化社会学」の下位部門と位置づける。要するに知識は、文化の下位範疇にあたるというのである。しかしそもそも、社会学を「文化社会学」と「実在社会学」に区分すること自体が疑問である (マルクス主義の用語を借りれば前者は上部構造の社会学に、後者は下部構造の社会学に、それぞれ相当する)。というのも人間存在においては、理想的なものと現実的なものが相互に媒介し合っているから。そして知識と文化の関係もまた、それと同じである。つまりは知識のないところに文化はなく、文化のないところに知識はない。その意味では知識と文化は、ほとんど一体のものである。要するに人間の活動全般が文化的活動であり、その文化的活動全般が知的活動としての性格をもっているのである。たとえば食事は、人間の生物学的 (動物的) 活動にあたる。しかしそれが、知的活動としての性格をもつことは明らかである。

もともと人間の知的活動の成果としての、知識そのものを対象とする社会学的考察が無意味というわけではない。一般に社会学の創始者と称されるコントは、知識の発展段階に応じて「三段階の法則」を提唱した。今日の社会学ではそれは、せいぜい歴史的な遺物として扱われるにすぎない。しかしそこでこのコントの理論を、知識社会学の先駆として再評価することもできる。シェーラーは「三段階の法則」を否定しつつ、それを独自の理論的枠組みで再解釈している。⁴すなわち宗教的思考 — 形而上学的思考 — 科学的思考は、知識の (発展段階ではなく) 分化過程であるとかは説く。そこにはさまざまな知識を、多元的・類型的にとらえる発想の萌芽がある。そしてそれは、今日の社会学界における支配的な思潮の一つである多文化主義にも相通ずるところがある。⁵たしかに宗教的思考も形而上学的思考も、少しも影響力を失っていないのがわたしたちの社会の現実である。

その意味では単純に、知識の発展段階を想定することには無理がある。しかし知識の発展段階説が、今日の社会学界から一ツウされてしまったわけではない。たとえばフランスの哲学者 M・フーコーの社会理論は、近代以前と以後の知識のありように本質的な断絶を見取ろうとすることに特徴がある。かれの社会理論全体を貫く中心的な主張は、「知識 (とりわけ学問的知識) は権力である」というものである。そこでフーコーの依拠するのは、知識のありようが社会のありようを決定づけるという理論的立場である。より具体的には「狂気」が「狂気」として、「監獄」が「監獄」として、「自己」が「自己」として存立するようになったのは、近代社会の前後で知識のありようが決定的に変化したことによるとかは説く。——さきにも述べたように知識の所有は、人間の存在理由そのものである。したがって「知識は権力である」とする、フーコーの理論的立場は特異なものでも何でもない。

一般に知識は、「真」であることを標榜している。逆にいえば「偽」であることを標榜して、知識が提示されることはない。たとえばウソでさえも、(それが「ウソ」であることが発覚するまでは) 一つの「マコト」として通用する。

さて学問の世界も、「真実」をめぐる闘争の場である。要するにいかなる学者も、学説も、学理も、学派も、学統も、「真実はわれにあり」と信じてやまないのが学問の世界である。社会学の歴史もまさしく、そのような学問的闘争の歴史と等価である。その上で問題になるのは、「真」の学説と「偽」の学説はどう判別されるのかということである。さしあたりそれは、社会科学（ないしは社会学）方法論の重要な主題である。そして一般に、学説の「真偽」を隔てるのは論理的な一貫性と客観的な妥当性の有無といつてよい。

しかし実際には、ことはそう単純ではない。一つの事象をめぐる多数の学説が対立し、競合し、共存しているのが、学問の現実であるから。本来古代ギリシアの哲学では、エピステマーとドクサが対置されていた。前者が「真なる知識」をさすのに対して、後者は「偽なる知識」（臆見ともいう）をさすというのがそこでの含意であった。しかし古代ギリシアの哲学で、「知識」の探究に最後のダン^b案が下されたわけではない。その後の哲学の歴史がエピステマーの獲得をめぐる、果てしない苦闘の様相を呈していることはご承知の通りである。フーコーはエピステマーを、「ある時代の人々の思考を支配する知的な枠組み」という趣旨の言葉として用いた。これはまさに、時間や空間を超越した普遍的なエピステマーは存在しないという宣言に相当する。しかしまたこういつてもよい。そう宣言することでフーコーは、エピステマーの制約を脱しようとした、と。

社会学の用語でこれに類するのは、イデオロギーである。一般にイデオロギーは、人々の信念・態度・意見などの体系をさす。しかしそれは、固有の思想的文脈のなかで用いられてきた。この用語が生まれた経緯は、次のようなものである。十九世紀初頭にフランスの哲学者デステュット・ド・トラシーは、自分の哲学の体系を「イデオロギー（観念学）」と称した。当時かれの学派の哲学者たちは、ナポレオンを批判していた。これに対してナポレオンは、こう応戦した。やつらはしよせん、「イデオログ（空論家）」にすぎない、と。それ以来イデオロギーは、もっぱらネガティヴな文脈で用いられる言葉となった。⁹このことを決定づけたのは、ドイツ出身の社会主義者K・マルクスとエンゲルスである。二人はイデオロギーが、人々の物質的な生活に根拠をもつことを主張した。二人はいう。「意識が生活を規定するのではなく、生活が意識を規定する」と。

それ以来二人の追従者たちⅡマルクス主義者たちは、さまざまなイデオロギーがいかなる社会的基盤をもつかを解明（暴露）しようとしてきた。とりわけそこでは、イデオロギーの階級的基盤の解明が問題となった。この場合Aは、Bの党派性を問題にする。しかしA自身の党派性は、けっして問題にならない（客観的に見ればA自身も、まさしく党派的な存在にすぎない）。このようなイデオロギー概念がまかり通ってきたのは、いったいなぜか。それはマルクス主義者にとって、自分の思想が特別なものであったからである。すなわちそれは、一つの I として理解されていたのである（何もマルクス主義者だけが、このような宿痾^{しゅうこ}をかかえていたわけではないが）。もちろんAは、Bの党派性とともにA自身の党派性も問題にすべきである。そして社会学者のなかに、そのような主張を行う者がなかったわけではない。たとえばハンガリー出身の社会学者K・マンハイムは、その一人である。

そしてまた「価値自由」を鍵概念とする、ウェーバーの社会科学方法論もこれと関連している。二十世紀末の共產主義体制の瓦解の前後からマルクス主義のイデオロギー概念は、丸つきり通用しなくなった。今日ではマルクス主義そのものが、典型的なイデオロギーと理解されている。すなわちAは、もっぱら自身の党派性を問題にされる立場になったのである。——わたしたちはそこに、思想の闘争の一つの結末を見て取ることができる。もともとイデオロギーの概念は、今日でもさまざまな文脈で用いられている。たとえばS・フロイトの精神分析の理論は、近代の中流家庭を前提にしているところがある。そう何気なく書くとき、わたしはフロイトの理論のイデオロギー性を問題にしていることになる。¹⁰AがBの思想を問題にすることは、AがBのイデオロギー性を問題にすることと等価である。ただしAも、つねに自身のイデオロギー性を問題にされるということである。

（奥井智之『社会学』（第2版）による）

（注）知識社会学……思想や文化活動などを含む広い意味での「知識」を、社会的な条件と関連づけて研究する学問。宿痾^{しゅうこ}……前々からかかっていて、治らない病氣。

「価値自由」……事実の確定だけを行い、その価値判断は行わない立場。

問一 傍線部 a・b にあたる漢字を含むものを、それぞれイ・ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

傍線部 a イ ソウ除 □ ソウ殺 ハ ソウ送 二 闘ソウ ホ ソウ失

傍線部 b イ ダン結 □ ダン義 ハ 算ダン 二 飲ダン ホ 禁ダン

問二 傍線部 1 「アダムとイヴの楽園追放の物語は、人間の誕生、人間の動物的存在からの解放の物語でもあった」とあるが、この「動物的存在」は文脈上どのような「存在」として語られているか。その説明として最も適切なものを、次のイ・ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 労働しない存在。

ロ 否定されるべき存在。

ハ 知恵を持たない存在。

ニ 欲望のままに行動する存在。

ホ 世界を受動的に受け入れる存在。

問三 傍線部 2 「人間存在においては、理想的なものと現実的なものが相互に媒介し合っている」とはどのようなことか。その説明として最も適切なものを、次のイ・ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 人間存在においては、理想的なものと現実的なものを区別するのは無意味だということ。

ロ 人間存在においては、理想的なものと現実的なものを区別するのは不可能だということ。

ハ 人間存在においては、理想的なものは知識に対応し、現実的なものは文化に対応していること。

ニ 人間存在においては、理想的なものは現実的なものを元に考えられ、現実的なものは理想的なものに近づこうとすること。

ホ 人間存在においては、理想的なものは現実的なものを受け入れざるを得ず、現実的なものは理想的なものを受け入れざるを得ないこと。

問四 傍線部 3 「たとえば食事は、人間の生物的（動物的）活動にあたる。しかしそれが、知的活動としての性格をもつことは明らかである」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次のイ・ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 食事は人間の空腹を満たすものだが、目でも楽しまなければならない要素を持っていること。

ロ 食事は単に生きるためのものではなく、人々が蓄積してきた様々な文化の集大成でもあること。

ハ 食事は生物としての人間になくはならないものだけでなく、労働の対価として食文化を獲得し発達させたこと。

ニ 食事はただ単に食べればいいというのではなく、どの国の料理もバランスよく栄養がとれるような知的な活動でもあること。

ホ 食事は人間の食欲という動物的な欲望を充たすものだが、健康のために食物繊維をとることが求められるように創意工夫されていること。

問五 傍線部4「すなわち宗教的思考——形而上学的思考——科学的思考は、知識の（発展段階ではなく）分化過程であるとかれは説く」とあるが、「かれ」（＝シェーラー）の説にはどのような意義があると筆者は考えているか。その説明として最も適切なものを、次のイ～ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 宗教的思考——形而上学的思考——科学的思考というように知識が分かれていったのなら、時代によって思考の枠組みがちがうことが説明できる。

ロ 宗教的思考——形而上学的思考——科学的思考を知識の多様なあり方とみなすことによって、社会を支配的な思潮に少しずつ近づけることができるようになる。

ハ 宗教的思考——形而上学的思考——科学的思考という具合に知識がこの三段階を踏んで発展したのでないとするならば、学問的な「真実」によって妥当性を持つ思考が優位に立つ。

ニ 宗教的思考——形而上学的思考——科学的思考を互いに媒介し合うような動的な関係にあると位置づけることで、人類の思考を「真実」をめぐる学問的な闘争の場に引き出すことができる。

ホ 宗教的思考——形而上学的思考——科学的思考を知識が分かれていくプロセスと捉えることで、知識がたった一つの「真実」によって位置づけられるような一元的な世界観から逃れることができる。

問六 傍線部5「たしかに宗教的思考も形而上学的思考も、少しも影響力を失っていないのがわたしたちの社会の現実である」とあるが、この文は文脈上どのようなことを示すために書かれたものか。その理由として最も適切なものを、次のイ～ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 三つの「思考」が発展していることを示すため。

ロ 三つの「思考」が並列していることを示すため。

ハ 「三段階の法則」が有効ではないことを示すため。

ニ 「三段階の法則」が十分ではないことを示すため。

ホ 「三段階の法則」を否定しきれないことを示すため。

問七 傍線部6「フーコーの依拠するのは、知識のありようが社会のありようを決定づけるという理論的立場である」について、次の二つの問いに答えよ。

(1) 筆者がここでフーコーの説を紹介したのはなぜだと考えられるか。その理由として最も適切なものを、次のイ～ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 知識は普遍的なものではないことを示すため。

ロ 知識の発展段階説が現在でも有効だと示すため。

ハ 知識は学説によって争われるものだと示すため。

ニ 知識は時代によってちがうとは限らないことを示すため。

ホ 知識は必ずしも「真」によっては保証されないことを示すため。

(2) 「知識のありようが社会のありようを決定づける」という理論的立場」とはどのようなものか。「自己」に即して説明した以下の選択肢の中から最も適切なものを、次のイ～ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 近代の前後で知識のあり方に大きな地殻変動のようなものが起き、「自己」が知識という権力を持つ存在として位置づけられたとする立場。

ロ 近代以前の「自己」は他者との関係においてのみ特別な存在たり得たが、近代以降は「自己」はただで価値を持つようになったとする立場。

ハ 「自己」が社会の中で特別な意味を持つ存在として認識されるようになったのは、近代以降の個人主義という知識の配置によっているとする立場。

ニ 近代以前の「自己」は精神と身体とに分けて理解されていたが、近代以降は知識を持つものとして統一的に理解されるようになったとする立場。

ホ 近代以前の「自己」は共同体の一員という以上の意味は持たなかったが、近代以降は国家と対峙する存在として捉えられるようになったとする立場。

問八 傍線部7「学問の世界も、「真実」をめぐる闘争の場である」という表現によって、筆者は何を言おうとしているのか。その説明として最も適切なものを、次のイ〜ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 学問は「真」をめぐる信念の体系だということ。

ロ 学問は競争がなければ「真」を獲得できないこと。

ハ 学問は永久に「真」にはたどり着かないということ。

ニ 学問は「真」ではなくて主観的なものでしかないこと。

ホ 学問は「真」か「偽」かを明らかにしようとしていること。

問九 傍線部8「そう宣言することでフーコーは、エピステーメーの制約を脱しようとした」とあるが、どういうことか。その説明として最も適切なものを、次のイ〜ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ フーコーは「真」を相対化することを目標としたこと。

ロ フーコーは「真」を妥当性のレベルにまで切り下げたこと。

ハ フーコーは学問における「真偽」の区別を取り払ったこと。

ニ フーコーは「真」の探求において時代の制約を最も重視したこと。

ホ フーコーは古代ギリシア哲学のような「真」の追究を無意味化したこと。

問十 傍線部9「このことを決定づけたのは、ドイツ出身の社会主義者K・マルクスとエンゲルスである」とあるが、なぜこう言えるのか。その理由として最も適切なものを、次のイ〜ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 二人はイデオロギーは自立し得ないと主張したから。

ロ 二人はイデオロギーは党派性にすぎないと説明したから。

ハ 二人はイデオロギーは対立によって問題とされるものと見抜いたから。

ニ 二人はイデオロギーはある文脈の中でしか機能しないものだと言ったから。

ホ 二人はイデオロギーは社会的基盤の影響を受けることを明らかにしたから。

問十一 空欄 I に入る語句としてもっとも適切なものを、次のイ〜ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 学説 ロ 真理 ハ 前提 ニ 知識 ホ 理念

問十二 傍線部10「AがBの思想を問題にすることは、AがBのイデオロギー性を問題にすることと等価である。ただしAも、つねに自身のイデオロギー性を問題にされるということである」とあるが、これを直前のフロイトの例に即して説明すればどうなるか。最も適切なものを、次のイ〜ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ フロイトの精神分析理論は近代の中流家庭を前提にしていると指摘することは、フロイトのブルジョワ性を暴くことになるが、同時に社会的な階層が精神を拘束すると考える筆者のイデオロギー性が暴かれることもある。

ロ フロイトの精神分析理論は近代の中流家庭を前提にしていると指摘することは、中流階層特有の家庭というシステムのイデオロギー性を暴くことになるが、同時に家庭を認めない筆者のイデオロギー性をも暴かれることになる。

ハ フロイトの精神分析理論は近代の中流家庭を前提にしていると指摘することは、「真」を重視しなかったフロイト理論のイデオロギー性を暴くことになるが、同時に「真」を重視する筆者のイデオロギー性も暴かれることになる。

ニ フロイトの精神分析理論は近代の中流家庭を前提にしていると指摘することは、フロイトの理論を時代の制約を受けたイデオロギーだと暴くことになるが、同時に筆者も時代の制約を受けたイデオロギーにとらわれていることが暴かれることもある。

ホ フロイトの精神分析理論は近代の中流家庭を前提にしていると指摘することは、フロイトの理論が知識のありようが決定的に変わった近代だけにしか通用しないものだと言ったと暴くことになるが、同時に近代に最大の価値を置く筆者のイデオロギー性も暴かれることになる。

(二) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

孝養のころろざし深く思ひたちにし道なればにや、恐ろしう、はるかに思ひやりし波の上なれど、荒き波風にもあはず、思ふかたの風なむことに吹き送る心地して、もろこしの温嶺といふところに、七月上旬の十日におはしまし着きぬ。そこを立ちて、杭州といふところに泊り給ふ。その泊り、入江のみづうみにて、いとおもしろきにも、石山の折の近江の海思ひ出でられて、あはれに恋しきことかぎりなし。

別れにしわがふるさとの鳩の海にかけをならべし人ぞ恋しき

それよりこほうだうに着き給ふ。いとおもしろくて、人の家ども多くて、日本の人過ぎ給ふとて、家々の人出でて見さわぐさまどもいとめづらし。歴陽といふところに船とめて、それより華山といふ山、峰高く谷深く、はげしきことかぎりなし。あはれに心細く、「蒼波路遠し 雲千里」とうち誦じ給へるを、御供にわたる博士ども、涙を流して、

「A 霧山深し 鳥 B 声」と添へたり。

山越え果てぬれば、函谷の関に着き給ひて、日、暮れぬれば、関のもとに泊り給ひぬ。「この関は、鳥の声を聞きてなむ開く」といふことを「しか」と聞きて、御供の人の中にはけたるものありて、「いざこころみむ」とて、夜中ばかりに、鳥の声にのみじう似せて、はるかに鳴き出でたるに、関の人おどろきてその戸を開く。「いとよしなきことをしつるかな」と、人々言ひにくむを、君も聞き給ひて、「ふるき心、さすがにおぼえけるにこそ」と、うち笑ひ給ふ。

(「浜松中納言物語」による)

(注) 孝養のころろざし深く思ひたちにし道……亡くなった父親への思慕の気持ちが高く、その生まれ変わりだと聞

かされた中国の皇子に会いに行く旅路。

温嶺、杭州、こほうだう、歴陽、函谷の関……いずれも中国の地名。

華山……中国の山名。

石山の折……かつて石山詣での合間に二人で琵琶湖のほとりで話をしたとき。

近江の海、鳩の海……琵琶湖のこと。

いはけたるもの……子どもじみて思慮分別が足りない者。

問十三 傍線部①の「られ」と異なる意味で用いられている「る・らる」の例として最も適切なものを、次のイ～ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

- イ みよし野の山辺に咲ける桜花雪かとのみぞあやまたれける
ロ 秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる
ハ 忘らるる身を宇治橋のなか絶えて人も通はぬ年ぞ経にける
ニ 大空は恋しき人の形見かは物思ふごとにながめらるらむ
ホ 水の泡の消えでうき身といひながら流れてなほも頼まるるかな

問十四 空欄 A

B

に入る漢字としてそれぞれ最も適切なものを、次のイ～ホの中から一つ選び、その解

答欄にマークせよ。

- A イ 煙 ロ 霜 ハ 雨 ニ 白 ホ 濃
B イ 吟 ロ 清 ハ 無 ニ 鳴 ホ 一

問十五 傍線部2「いとよしなきことをしつるかな」の解釈として最も適切なものを、次のイ〜ヘの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

- イ とてもおもしろいことをしているなあ。
- ロ とても大人げないことをしているなあ。
- ハ とてもつまらないことをしたものだなあ。
- ニ とてもおもしろいことをしたものだなあ。
- ホ とても大人げないことをしたのだったなあ。
- ヘ とてもつまらないことをしたのだったなあ。

問十六 傍線部3「おぼえ」の主語にあたる人物はだれか。最も適切なものを次のイ〜ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

- イ 家々の人
- ロ 博士ども
- ハ いはけたるもの
- ニ 関の人
- ホ 君

問十七 古文の後段の話は、中国の戦国時代の孟嘗君に関する「鶏鳴狗盗」の故事を踏まえているが、次の漢文は、その孟嘗君の誕生と幼少のころの逸話である。これを読んで、あとの(1)〜(3)の問題に答えよ(設問の都合上、返り点・送り仮名を省いたところがある)。

薛公^{セツ}、田嬰^{テン}有^リ子四十余人。其^ノ賤妾^ニ有^リ子、名^{ヅク}文^ト。文^ニ以^テ五月五日^ニ生^{マル}。嬰^ニ告^{ゲテ}其母^ノ曰^{ハク}、勿^レ舉^{グルコト}也。其母竊^{カニ}舉^{ゲテ}生^{ヤシナフ}之^ヲ。及^レ長^{ズルニ}、其母因^{リテ}兄弟^ニ而見^{まみエシム}其子文^ヲ於田嬰^ニ。田嬰怒^{リテ}其母^ヲ曰^{ハク}、吾^ム令^ム汝^ヲ去^{サテ}此子^ヲ、而^{ルニ}生^ゾ之^ト、何^ゾ也。文頓首^シ、因^{リテ}曰^{ハク}、君所^ニ以^テ不^レ舉^ゲ五月子^ヲ者、何^{ゾト}故^{ゾト}。嬰曰^{ハク}、五月子^ヲ者、長^{ナゲ}与^{シクバ}戸齊^ヲ、將^{サドレ}不^レ利^{ラント}其父母^ニ。文曰^{ハク}、人生受^{クル}命^ヲ於天^ニ乎、將^{ハタ}受^{クル}命^ヲ於戸^ニ邪^ト。嬰默然^{クリ}。文曰^{ハク}、必^ズ受^{ケバ}命^ヲ於天^ニ、君何^ゾ憂^{ヘン}焉^ナ。必^ズ受^{ケバ}命^ヲ於戸^ニ、則^カ可^レ高^ニ其戸^ヲ耳^ヲ。誰^カ能^ク至^ル者^{ゾト}。嬰曰^{ハク}、子休^{ヤメヨト}矣^ナ。久^{シクシテ}之^ヲ、嬰乃^チ礼^シ文^ヲ。使^ム主^リ家^ヲ待^セ賓客^ニ。賓客日^ニ進^ミ、名聲聞^{コユ}於諸侯^ニ。諸侯皆^ニ使^ム人^ヲ請^フ田嬰^ヲ以文^ヲ為太子^ニ。嬰許^ス之^ヲ。嬰卒^{シテ}而文果^{シテ}代^{リテ}立^ツ於薛^ニ。是^レ為^リ孟嘗君^{ナリ}。

〔『史記』孟嘗君伝による〕

(注) 薛公……薛国の王。 頓首……頭を地に打ちつけて行う拝礼。

(1) 傍線部 4 「必 受_二命 於_一 戸、則 可_レ 高_二 其 戸_一 耳。」の解釈として最も適切なものを、次のイ～への中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 人の運命は戸口に左右されるもので、その戸を高くしさえすればよいのです。

ロ 人の運命は戸口に左右されるもので、その戸より背はきつと高くなるにちがいありません。

ハ 人の運命は戸口に左右されるもので、その戸を立派にすることができません。

ニ 人の運命が戸口に左右されるのであれば、その戸を高くしさえすればよいのです。

ホ 人の運命が戸口に左右されるのであれば、その戸より背はきつと高くなるにちがいありません。

ヘ 人の運命が戸口に左右されるのであれば、その戸を立派にすることができません。

(2) 空欄 C に入る語として最も適切なものを、次のイ～ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 必 ロ 将 ハ 敢 ニ 当 ホ 未

(3) 傍線部 5 「皆使人請田嬰以文為太子」を訓読したときの返り点として最も適切なものを、次のイ～ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 皆 使_三 人 請_二 田 嬰 以_レ 文 為_二 太 子_一

ロ 皆 使_レ 人 請_二 田 嬰 以_三 文 為_二 太 子_一

ハ 皆 使_レ 人 請_二 田 嬰 以 文 為_二 太 子_一

ニ 皆 使_レ 人 請_二 田 嬰 以_レ 文 為_二 太 子_一

ホ 皆 使_レ 人 請_二 田 嬰 以_レ 文 為_二 太 子_一

〔以下 余 白〕